



# 六花

2010

平成22年

俳句雑誌りっか

Cover designed by Little Bird

6月号

い 石で焼く山女に味噌の芳しき  
づ 頭上から青鷺の啼き降り来たる  
れ 霊山の水走り来る代田かな  
の 野苺を食べぬる種の音立てて  
お 大筆を洗うてゐたる徽の家  
ほ 星に月ぶら下がりをり梅雨晴間  
ん んと言ひて青大将に息を呑む  
と 遠吠の谿の向ひに武者幟  
き 桐の花拾うて桐を見上げけり  
に 錦鯉うねりては紅強めたる

か かんばせに日の照返す田植かな

に 偽物を楽しんでをり夏茶碗

よ 横飛びに消えてしまひし縞泥鰯

う 卯の花の雨だれに笠傾かたぶきぬ

ご ごろ石によろけて鮎の川渡る

か 軽石を代りとしたる浮いてこい

う 植田澄み足跡深く浅くあり

い 諸植うる作業ズボンの裾濡らし

あ 当たるたび音に弾かれ金亀子

ま 松の木の山藤雨に撓みけり

い 板前の眼強める鰻かな  
づ 図のやうにならぬ折紙梅雨籠  
れ 練炭に焰を熾す木下闇  
の 能面の飾られあるは涼しかり  
お 落人の邑に溢るる螢かな  
ほ ほうと息つかば夜名告る不如帰  
ん んつと声上げて昼寝の身を起こす  
と 遠ざかるほどに植田の青々す  
き きらきらと金魚のしなる夕べかな  
に 逃げ惑ふ形に焼かるる岩魚かな

か 柿の花眠れるやうに咲きぬたる

に にこにこと冷酒注ぎきて切りも無し

よ 読み返す文は古びて燕来る

う 海鳴や重く昇れる夏の月

ご 胡麻の香の豊かに立つる夏料理

か 髪洗ふ思ひ切りよく切りにしを

う 瓜挽いで畦に嚙れる昼餉かな

い 石橋を横切り歩く螢かな

あ 雨後や渦巻き現るる蟻の群

ま 睫毛濃き目の潤へる螢の夜

# 鴨引きし壕の水面を雨の打つ 久永つう

かもひきしほりのみなもをあめのうつ ひさながつう

摘み草の匂ひをのせてゆける風

鮎の鮮度に糶のはげしかり

春の潮蹴つて漁へと舵を取る

沈丁のおもむろに解く蕾かな

春になつて鴨が北方へ帰って行くことが引鴨で「鴨帰る・行く鴨」ともいい、帰らなかつた鴨を残る鴨・春の鴨という。掲句、鴨が引いて（去つて）しまった濠にはどこか寂しさが漂い、その水面に雨が降っている。鴨の居なくなつた城の壕に雨が降っているのを、「降る」ではなく「打つ」という言葉使つたのがいわゆる表現なのである。「打つ」というのは非難する・なじる・きざつておすなどの義があり、掲句の場合、寂しさに寂しさをかぶせるような言葉。雨のの光景が平生でさえ淋しいのに、鴨が帰つたから一層寂しさをつのらせているというのである。また、その雨の濠に残つた哀れな鴨の姿にまで連想が及ぶ。

雪 卯 集

四月馬鹿

貝森光洋

マジックの鳩の出て来ぬ四月馬鹿  
春燈というため息の漏れだせり  
蝌蚪の紐水の心のありどころ  
生き様の如き走り根桜大樹  
LPの奏でる春愁ビートルズ

寒 卯

松本文一郎

寒の入産みたて卵手に入りぬ  
遠目にはほんのり朱き雪中梅  
翼かな行先変へて買ふ切符  
鱗削ぐ刃先の光春浅し  
庭下駄の裏返りある寒戻

せつじゆしゆう  
雪樹集

花の庭

空

音

花の庭犬と主を待ちにけり  
山桜明治生まれの伊予かすり  
見上ぐれば視線を返す桜かな  
花びらの己の重さより散りぬ  
花いかだ流れる風のなき真昼

桜草

出口

誠

雨音の激しくなりぬ夜半の春  
夕闇に音立ててをり春の川  
冴返る畑へ向かふ群雀  
煙突の上に乗りけり春夕日  
桜草濃きも薄きも同じ色

# 蛍雪譚 六甲

マジックの鳩の出て来ぬ四月馬鹿

貝森 光洋

予定していた鳩が出てこない。観客もマジシャンもお互いにきよんとしている。まさか？誰かがいたずらで、仕掛けの鳩を抜いていたのか、マジシャンがエイプリルフールを利用してわざと鳩が出てこぬ振りをして客の笑いをとったのか？などと、あれこれ愉快な想像がふくらむ。客の「鳩が豆鉄砲をくらった」ような顔も。

木洩れ日や八十八夜のさがり苔

梶浦玲良子

さがり苔とは深山の松・樅などに着生して垂れ下がる「さるおがせ」や「さがり苔」の種類で、樹木が羅（うすもの）をまとったような妖しげな姿が八十八夜の木洩れ日に光っている。水分と光合成だけで成長し・栄養を一切他から取ることはないの、まるで仙人のようだという。一部の山男の間では、女のヒステリーと男の浮気止めに効くと信じられて薬草にもなるらしい。また、別名チャシブゴケとも言うらしいから、八十八夜と繋がりがあるのかも。女蘿（さるおがせ）とも書く。蘿はこけ。

## 六花集 会員作品

覚悟なきままの独居よ春炬燵  
紅梅の一枝に白き結び文  
土雛を飾りてよりの書架親し  
列車過ぐたびに敬礼新社員  
啄木忌行けども行けども花屋なく

平居 濤子

白梅の散りゐる石の二三段  
直角の団地の空の春の月  
窓際にひりひり尖り来る寒気  
春光や歪み真珠のネックレス  
暮れ残る薄紙月や春の風

田尻 勝子